43

『古今医統大全』の脈候について

田中利江子
日本鍼灸研究会

徐春甫（生没年不詳）の著した『古今医統大全』百巻は，明の嘉靖35年（1556）に成立した医学全書で，明代中期以前の歴代の医書及び経史百家の医学に関する資料を収録するとともに，『内経』から養生・導引に至る広範な分野を網羅している．徐春甫は明代の医家で，名は春甫，字は汝元，祁門（安徽省）の人，幼少期は科挙を目指すも病弱により医家に転じ，内科，婦人科，小児科に通暁し，太医院医官に任ぜられた．著作に『医学入門捷径六書』『痘診泄秘』などがある．本書では，病門中に病機，治法，薬方と並んで脈候が立項されている．以下では脈候において脈状がどの様な役割を担っているかを検討する．

『古今医統大全』の巻1は歴代の著名な医家，医書の略解，巻2は『内経』の要旨，巻3は医制や医学概論，巻4は『内経』の脈候，巻5は運気論の概説，巻6，7は鍼灸専門巻（巻6の主論「経穴主治条文」は『鍼灸聚英』に依拠している），巻8～79は各病証に対して『内経』以下の諸書を引用して医学理論を簡明に論じ，病門ごとに病機，治法，薬方の体例を採り，脈候を附す場合は病機の後に，鍼灸法を附す場合は病門の最後に置いている．巻80，81は主に腫瘍を論じ，巻82，83は婦人科，巻84は求子法，巻85は周産期，巻86，87は老年科，巻88～90は小児科，巻91は痘疹，巻92は奇病，巻93は経験秘方，巻94～96は本草，巻97，98は製薬や薬方，巻99，100は養生法を取り扱っている．

脈候を有する病門（證，候なども含む）は全112門で，それぞれは17～975文字で構成されているが，160文字以下の条文が80%を占める．小児科に関する病門は18門と全体に対する比率が高く，20～69文字と短文であり，しかもそのうちの7病門は小児固有の脈法である「虎口脈」を併記している．

出典として明記されるものとしては，『脈経』が38回，『内経』24回（「経曰」や平人気象論など篇名の記載がある11門を含む），『金匱要略』11回（『金匱』『要略』各5回を含む），『難経』6回，『傷寒論』『脈訣』各3回などと続き，全般に原典に属するものが多い．典拠として著者名を記するものは「仲景」6回，「丹溪」5回，「厳氏」「陳無擇」各3回（「陳氏」1回を含む）などであった．

脈状の多くは，病態の把握や弁別に用いられており，次いで病因推定の一助を爲し，数少ないものの，「脈緊而無汗謂之傷寒．脈陰陽俱盛，重感於寒而緊渋，変爲温瘧」のような病機の概論も散見している．「脈浮而遅者，易治．急大数疾者死」のような予後判定は68病門と全体の約60%にのぼり，「中診而数……大小柴胡湯斟酌用之」のような湯液の指示をふくむ病門は3門，「寸口関上脈緊，宜針」のような鍼灸指示は4門，その他「滑而数者下之」などの治法指示が21門あり，「不可治」と禁忌を示す脈證も6門あった．傷寒門では脈状が11種の湯液弁別の指標となっており，内傷門では人迎気口診について「古人以脈上内外傷於人迎気口．人迎脈大於気口為外傷，気口脈大於人迎為内傷」と述べている．

『古今医統大全』の脈候における脈状は，病態の弁別と予後判定に利用されている割合が多いが，時に湯液や鍼灸などによる治法の指示と結びついている場合も見られる．